

卓 話

中山恭子先生と拉致問題

野井 晋 会員



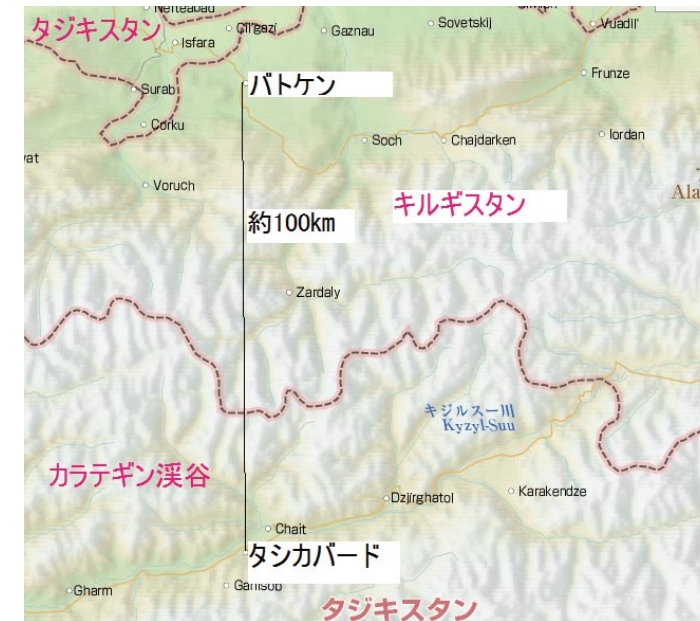
中山恭子さんの余り知られていない過去の経歴から、何故、北朝鮮拉致被害者救出問題ご担当者になられたかを検証すると共に活躍の場となった中央アジア三国（ウズベキスタン・タジキスタン・キルギス）の話を卓話させていただきます。

中山恭子さんは小渕恵三総理の時代、駐ウズベキスタン共和国特命全権大使兼駐タジキスタン共和国特命全権大使を平成11年（1999）7月に拝命し、8月12日にカリモフ大統領に信任状を奉呈し、特命全権大使としてウズベキスタン政府の要人や各国大使に着任の挨拶をし、9月に開催する日本文化月間の準備を進めていた最中の8月23日午前1時30分頃、拉致事件が発生しました。



キルギス共和国南西部オシュ州アルティンシルガ地区にて資源開発調査に従事していた国際協力事業団（JICA）の専門家4名が、キルギス人通訳1名及びキルギス軍関係者2名と共に、タジキスタンより越境してきた武装勢力（ナマンガニー）に誘拐されるとの事件が発生した。10月25日午後1時15分に、4名の専門家と通訳がタジキスタンとの国境地帯にあるキルギス領内のカラムイクで無事保護された。（日本政府外務省の報告による）

この救出活動での日本政府外務省と中山恭子さん率いるウズベキスタン大使館員一同との対処方法が違いすぎた。前者はキルギスに拘りすぎたように考えられる、後者は「郷にいれば郷に従え」のまま突き進んだ結果、最良の結末を迎えることが出来たようだ。



この項、「ウズベキスタンの櫻」より抜粋、『この5人の無事救出は、この地域の人々と深い交友関係で結ばれ広い友人ネットワークを持ち信頼を勝ち得ていた一人の人物、ウズベキスタン大使館次席の高橋博史参事官がいたからこそ出来たことでした。そして彼とその仲間が、冷静に誠実に拉致実行者のナマンガニーのグループと渡りあったからこそ解決出来たものです。高橋参事官の存在がなければ、無事救出など到底無理だったことでしょう。

その日の午前零時頃、ナマンガニーは人質をタジキスタン北部の山中で解放しました。しかしこの事件に

ついて、日本政府は当初からキルギスに全てを任せるとの方針を採っていましたので、日本政府の強い要請により、五人はキルギスで解放されたこととするため一旦キルギスへ運ばれ、キルギス政府から日本に渡されることになりました。五人はタジキスタンの山を越えてキルギス南部のカラムイクまで歩き、そこからヘリコプターでバトケンに移送され、さらに軍用機でキルギスの首都ビシュケクに向かいました。報道陣もキルギスで待ち構えていました。

しかし、中央アジアの人々に対してはこのような「茶番劇」は通用しません。中央アジアの人々はこの拉致事件の解決がどのように進められたかについて当然のことながら大変よく分かっていました。従って日本政府としても、人質解放に当たって実際に力があつたのはタジキスタン政府とタジキスタンの関係者であり、ウズベキスタン政府の協力があつたればこそだということをしっかり認識する必要がありました。

森前総理はじめ主だった方々がこのような経緯、実際の動きを理解してくださっていました』

『・・・』内の記述に対し、国会で問題にされたりもしましたが、私にとっては外務省の返答は所謂当局のお答えで不満足そのものと思っています。

それに引き替え「ウズベキスタンの櫻」について当該、中央アジア三国の何方からも異義申し立て苦情等があつたという話は聞いたことがありません。信頼されているのです。国益を優先して外交をする事こそ大切なことだと実践されているのです。

大使としてのご使命を立派に果たされたことを誰よりも小泉純一郎総理が認識されており、内閣官房参与に任命され、安倍晋三、福田康夫、麻生太郎総理に受け継がれ総理大臣補佐官（拉致問題担当）として精力的に活動されています。（以下略）

中山恭子プロフィール

■麻生内閣総理大臣補佐官（拉致問題担当） ■著書 「ウズベキスタンの櫻」